7/10 使徒の働き 11 章 19-26 節「キリスト者と呼ばれるように」

小池 宏明 牧師

今朝の箇所では、エルサレムから北に約 500 キロ離れた町、アンティオキアにキリストの教会が誕生する次第を記している。迫害を受けて散らされた信徒たちが、異邦人にも福音を伝えてキリストの群れが誕生した。

＊宣教協力は当たり前

「アンティオキアで異邦人が救われた」という知らせは、遠く、エルサレムの教会にも伝えられた。すると、エルサレム教会は、正式な働き人として、聖霊と信仰に満ちたバルナバを派遣した。バルナバは、救われた人々に、堅く信仰に留まるように励ました。また、回心したサウロ（別名パウロ）をタルソから連れて来て、旧約聖書に精通している彼を聖書と信仰教育の担当に就けた。また、27 節以下では、エルサレムをはじめユダヤ地方が大飢饉のときに、アンティオキア教会が物資を集めてエルサレム教会に送り届けている。さらに、13 章では、アンティオキア教会がパウロとバルナバを世界宣教へと派遣する決定がなされた。生み出された教会がさらに新たな教会を生み出して、その教会との協力関係が広がって行くのだ。今日においても、地域の教会が、教派や教団を越えて協力関係をもつならば素晴らしいことだ。

＊協力の土台はキリストに留まること

このような協力関係を作っていくために必要なことは 23 節後半、バルナバがおこなった「**心を堅く保っていつも主にとどまっているようにと**」いう励ましだ。「心を堅く保って」を、ギリシア語原典で読むと「供え物」を表す言葉が使われている。信仰者が、自分自身を主に献げること、自分の持っている物を主に供えることは、堅く決意して主イエス様の御側に「居る」ことを表している。主イエス様に自分を献げることは、痛みや苦しみを伴うことかもしれない。しかし、キリストのために犠牲を惜しまない決意を堅く保てば、働き人を送り出し、救援活動をするような協力関係を作ることができるだろう。こうして、26 節「**弟子たちは、アンティオキアで初めて、キリスト者と呼ばれるようになった。**」キリスト者（クリスチャン（ギリシア語：クリスティアーノス））とは「キリストの取り巻き」「キリストのみに生きる群れ」「キリストなしでは生きられない人々」のことを意味する。

私たちは、「キリスト者、クリスチャン」と呼ばれるにふさわしい者になっているだろうか？イエス・キリストを取り巻く「キリスト親衛隊」のようになっているだろうか？イエス・キリストなしにひと時も生きることができない私になっているだろうか？